「鳩」の図像学 ―イタリア美術の「鳩」を巡る旅―

堀松　絵里

研究旅行概要

8 月 31 日早朝、サルデニア島（他件の研究先）からイタリア本土、チヴィタヴェッキア港へ到着。電車でローマ・テルミニに着き、アパートを借りる。ローマ慣らしに、アパートのあるマンゾーニ周辺から、パンテオン近くのジェラート屋「ジョリッティ」を目指しつつローマを観光する。

トレヴィの泉・パンテオンなど

翌日、アパート付近を調査。サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ聖堂の正面の並木道を通り、楽器博物館を訪れるが休館。教会と城壁（と落書き）を見て、ラヴェンナへと出発する。

夜八時、雨のあとの静かな並木道をオレンジの光に照らされながらホテルへ。2 泊する。

ラヴェンナ：　サンタポッリナーレ・イン・クラッセ聖堂
サンタポッリナーレ・ヌオヴォ聖堂
サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂

サン・スピリト聖堂とアリアーニ洗礼堂
サン・ヴィターレ聖堂
ガッラ・プラチーディア廟
ネオニアーノ洗礼堂
司教博物館
サン・フランチェスコ聖堂とダンテの墓　　など

9月3日、ラヴェンナを堪能し、ローマへと戻る。

翌日、ヴァティカン博物館、サン・ピエトロ大聖堂・広場に半日を使い、それからサンタンジェロ城、ナヴォーナ広場、ポポロ広場などを歩く。

5日、観光最終日はコロッセオ周辺やトラステヴェレ地区を中心に観光。イタリア人も一緒に最後の晩餐。

6日、いつものバールのお兄さんに別れを告げ、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂に旅行の安全を祈り、日本への帰路に就く。

【報告書】

１．目的

“「鳩」の図像学　～イタリア美術の「鳩」を巡る旅～　”と題した今回の研究旅行の目的は、これまで図版や資料で集めてきた「鳩」図像の対象をこの目で実際に見ること、そしてよく観察し、スケッチし、記録に残すことであった。

象徴的図像が使われ始めた初期キリスト教時代の建造物を中心に、ローマ帝国の首都であったローマ、そしてローマ帝国衰退期にもっとも繁栄した西ローマ帝国の首都ラヴェンナの町での研究を企画した。

２．研究調査

8 月 31 日、ローマにアパートという拠点をかまえ、翌日、ローマ・テルミニからフィレンツェ経由、ボローニャ行きの電車に乗った。ボローニャからはローカル線で田舎の風景を楽しむ。街路樹のきれいな小都市、ラヴェンナで訪れたのは以下のようなところである。

ラヴェンナ：　サンタポッリナーレ・イン・クラッセ聖堂
サンタポッリナーレ・ヌオヴォ聖堂
サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂
サン・スピリト聖堂とアリアーニ洗礼堂
サン・ヴィターレ聖堂
ガッラ・プラチーディア廟
ネオニアーノ洗礼堂
司教博物館
サン・フランチェスコ聖堂とダンテの墓　　など

落ち着いた静かな町をあとにして、大都市ローマで訪れたのは以下のようなところである。

ローマ：　ヴァティカン博物館とサン・ピエトロ聖堂
サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ教会
サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ聖堂
サン・クレメンテ教会
サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂　　など

３．成果

約 1 週間、異国の地でのフィールドワークは、研究対象だけでなく生活・文化・出会いなど多くの点で新たな経験をすることとなった。その中の一つ、この旅行でもっとも感銘を受けた聖堂について研究してみた。

４－1　出会い

ホテルの前からバスに乗り、繁華街から郊外のほうへ約十分余り。広い草地に悠然とたたずみ、守られているかのように全体を木で覆われた茶色の建物が姿を現した。外観は実に簡素な造りで、お金を払い、中に入るや否や、そのすばらしさに森羅万象全てが時を止めたかのような感覚に陥った。これは言葉では説明できない、実際体験する事でしか感じる事のできない感嘆や敬意、畏敬、崇高などの感情が入り混じった末の無の境地だったのかもしれない。そんなことを思わせる建物こそが、サンタポッリナーレ・イン・クラッセ聖堂である。

４－2　都市ラヴェンナ

サンタポッリナーレ・イン・クラッセ聖堂はヨーロッパはイタリア、アドリア海に面した小都市ラヴェンナの近郊に建つ。ラヴェンナはヴェネツィアの南、ボローニャの東に位置するエミリア・ロマーニャ州に属する都市である。

エミリア街道を中心とし古代から交通の要衝として発展してきただけでなく、ポー川流域の穀倉地帯では小麦やブドウの栽培、牛・豚の飼育が盛んであったこの州は、エトルリアからビザンチン、ロマネスク、ゴシック、ルネサンスの色彩を帯びた都市を多く持つ。ヨーロッパ最古の大学を持つ州都ボローニャは、交通や産業の中心地であり、農産物の集散地となっている。

ビザンチンの歴史が深いラヴェンナは、ダンテが『神曲』の中で「色彩のシンフォニー」と賞賛した“モザイク”が多く現存する人口 14 万人の町である。5・6 世紀の美術や建築を今に残す古都はいかなる歴史を持っているのか。

４－3　ラヴェンナの歴史

ラヴェンナという町はポー川流域の沼沢地に地中に多くの杭を打ち込んで作られた町である。紀元前 234 年にローマ人が入植してから港を中心に、またローマへの街道として発展を続けた。港は軍事用のみならず商業用としても機能し、5,6 世紀には西方でももっとも繁栄した都市となった。ラヴェンナが歴史の表舞台に登場したのには歴史的な背景がある。

5 世紀、ローマ帝国は北方からの侵略者によって衰退期を迎えていた。フランク、ゴート、フン、ヴァンダルなどのゲルマン系の戦闘部族と、大半が外国人傭兵であるローマ帝国軍の紛争が長きに渡って続いていたからである。侵略軍は、北、中央、東ヨーロッパから、豊かな地中海沿岸地域を目指し南下。それぞれの部族はそれぞれの地に定住し、次第に土着の「ローマ」文化へと同化していった。

一方、領土を縮小しながらもその権力をかろうじて保つローマ帝国、テオドシウス 1 世

（在位 379 年～595 年）は 2 人の息子に領土を二分し分け与えた。長男は東ローマ帝国のアウグストゥス、次男は西ローマ帝国のそれとなった。西ローマ帝国のホノリウス帝はミラノへの退却を強いられたが、402 年、西ゴート族、アラリスクの侵略によりラヴェンナへと遷都した。防衛の容易な都市ラヴェンナで北方からの侵略者に対抗するためであった。

こうして西ローマ帝国の首都となったラヴェンナは、ホノリウス帝とその妹、ガッラ・プラチーディアによって町の基礎が築かれただけでなく、その後の侵略者らによっても造られていった。

というのも、476 年には北方のオドアケルが占拠、またその後は東ゴートの王、テオドリスクにより支配されたのだ。しかし 540 年にはユスティニアヌス帝率いるビザンチン帝国の保護下へと入り、751 年まで東西帝国を結ぶ主要な物資の集散地として大いに繁栄した。

ローマ帝国時代から北方民族支配下、またビザンチン帝国時代の 400 年から 750 年頃にかけて約 60 以上もの聖堂があの小さな都市に存在していた。その中の一つ、ラヴェンナの良港クラッセに建てられたのがサンタポッリナーレ・イン・クラッセ聖堂である。

４－4　聖堂とモザイク

Basilica di Sant'Apollinare in Classe（バシリカ・ディ・サンタポッリナーレ・イン・クラッセ）は、ラヴェンナの町から南東 5km に位置する、6 世紀半ばに建てられたビザンチン教会建築である。540 年からのビザンチン帝国保護下の 549 年に司教マクシミアヌスにより献堂されているが、工事は東ゴート支配下の司教ウルシキヌス（在位 532、3 年から 535、6 年）の時代に着工された。銀行家ユリアヌスによる寄進で、土地の聖人、ラヴェンナ初代司教“聖アポッリナーレ”に奉げられている。初代司教の墓があったとされる土地に隣接して建てられたといわれており、歴代ラヴェンナ司教が 595 年から 765 年までここを墓所とした。

南北各 12 本の柱を持つ典型的な大型バシリカ式[1]聖堂だが、その内部にはビザンチン美術を代表するきらびやかなモザイク壁画を有する（図版Ⅰ・Ⅱ参照）。

モザイクとは大理石や自然石、彩色されたガラスの小片（テッセラ）を寄せ集めて絵や模様を描く技法、またそれによって完成されたものを言う（図版Ⅲ参照）。モザイクの作り方を簡単に説明すると以下の通りである。

1－モザイク装飾をする物、場所（たとえばベニヤ板、壁など）に原画を模写する。

2－色々なテッセラ（小片）を割り当てる。

3－必要であれば妥当な大きさにカットし、テッセラを接着剤で貼り付けていく。

---

[1] 聖堂の建築様式。長方形プランの左端に半円形のアプシスをもち、本堂部分は屋根の高い身廊と、南北に各一つの側廊があり、身廊と側廊は列柱のアーケードで分けられているのが典型的な三廊式のもの。

4－仕上げ剤を塗り、完成となる。
ラヴェンナのモザイクは 6 世紀の中頃から盛期を迎え、聖書の中のエピソードや教会ゆかりの聖人の業績などを中心としたテーマが主に描かれた。モザイクは特にその“神聖さ”を強調するもので、超自然的空間を生み出すとされている。テッセラ一つ一つの凸凹感によって、描かれた物や人物が輝きをもって浮き出したように見えたり、逆に沈んだように見えたりする。見る角度や時間による日の加減、光の反射などによってさまざまな変化に富んだ印象を我々に与えるからである。ビザンチン様式の教会は、外観は簡素で、内部のモザイクはきらびやかな豪華さを持っている。こうしたビザンチン文化はここラヴェンナからヴェネツィア、ローマ、シチリアへと継承されていったのである。

サンタポッリナーレ・イン・クラッセ聖堂に話を戻すと、聖堂正面のアプシス（内陣）とその上部、勝利門の壁面にモザイクが装飾されている。549 年に献堂された当時は、半ドームのアプシスとその下、窓にはさまれた 4 人の司教、そして両脇の 2 天使のみが装飾されていた。

４－5　装飾
聖堂に足を踏み入れるとまず目に飛び込んでくるのがアプシス、聖堂正面の内陣のモザイク壁画である。丸く青色に輝く背景に黄金の大きな十字架、そしてその下で手を広げる一人の男性像が目立つ。
詳しく見ると、青色の長丸や緑色の長方形、白い丸で描かれた宝石で飾られた円光の中は全面青色で飾られ、中央には、これまた同様の宝石で装飾された金色の十字架が描かれている。十字の交差するところにはキリストの顔が描かれている。十字架の周りには青い背景に光るアスタリスク型の金銀の石が輝いており、左右には“A”（アルファ）・“ω”（オメガ）の文字と、上下に“IXOYC”・“SALVSMVNDA”の文字が見える。
中央の円光の外側、半ドームの上部は、背景が金色に輝き、白や水色、灰色で雲の形が作られている。中央上部には右の掌が、左右には 2 人の人物の上半身が描かれている。
半円下部は、さまざまな緑の小片で自然の風景が表わされており、いくつもの種類の木や草花、岩や石、数種類の鳥が生き生きと描かれている。中部左右には、あわせて 3 頭の羊が見える。左右 6 頭ずつの羊が行儀よく並ぶその中央には一人の男性が両手を広げて立っている。その頭上には“†（十字架の記号）SANCTIVS　APOLENARIS”の文字と後光が射している。
このアプシス・モザイクは「キリストの変容」をテーマとして描かれたものである。巨大な十字架の出現はキリストの再臨と救済を象徴している。左右の 2 人の半身像は預言者モーセとエリアで、3 頭の羊はこの場面を目撃した 3 人の使徒を表しているのである。中央の男性は町の守護聖人であり、初代ラヴェンナ司教である聖アポッリナーレで、司教の服

装をしてこの「変容」の奇跡を両手を空に広げて祈る“オランス”のポーズで讃美する。周囲の風景は楽園・天国の情景を表しており、その中に並ぶ羊の群れは、司牧すべき羊、つまりラヴェンナ市民、教徒を示唆している。このように、十字架や動物、植物といった身近にあるありふれた図像を用いながら内容豊富な中に思想の神秘性を表現するのである。

半ドームから視線を下に戻すと、窓と窓の間の壁に 4 人の人物が描かれている。正面に対し左からそれぞれ“ECIF STVS”・“SCSSE VERVS”・“SCSVR SVS”・“VRSI INVS”という表記がある。彼らは歴代のラヴェンナ司教たちである。

両サイドにはそれぞれ羽の生えた人物がたたずんでいる。これは、緑の背景に草花が描かれた「楽園」の情景の中に描かれた天使である。彼らはアプシスの両側に立って聖堂を守護している。左には“ミカエル”、右には“ガブリエル”と表記されているのが確認できよう。

後の 7 世紀から 9 世紀にかけて追加された勝利門のモザイク壁画を見てみると、最上部には 4 世紀のローマの装飾体系を手本として描かれた、キリストの半身像と象徴の図像で表された 4 人の福音書記者が見える。その下の段には、両端に描かれた都市、ベツレヘムとイェルサレムから歩み出る子羊の行列が描かれているが、これは教徒を示している。また、天使の上部には左右に棕櫚（しゅろ）の木が生え、天国を表している。

４－6　「鳩」図像

上記のとおり、身近な動植物などの図示によって、直接的ではなく、間接的にキリスト教の本質を体感するという形式が、この聖堂のみならず、初期キリスト教美術以来多く用いられてきた。子羊や孔雀、魚、鳥や草花といったさまざまな象徴的モチーフが、教義の表現方法に多様性を持たせる役割を担ったのである。

その中の一つ、現代では「平和」の象徴として知られる「(白い）鳩」の図像について取り上げたいと思う。

以下、図像「(白）鳩」が象徴する物事を羅列する。

古代ギリシア：愛・調和

キリスト教美術：聖霊・信徒の魂・赦し・救い・平和・吉報・天啓・魂・死者の魂・無垢の魂・純潔・信者・もしくは、花模様の中に描かれる純粋に装飾的な模様

作例として、サンタポッリナーレ・イン・クラッセに見られる「鳩」図像を上げながら解説する。

Ｉ十字架に舞い降りる一羽の白い鳩

大理石の柱で分かたれた身廊の両サイド、13 のアーチの付け根には、装飾的で、しかし

有意なモチーフ壁画がある。

アプシスに向かって左側の最後尾には、水色を背景とし、4 本の白い線のようなものが入った小山に、三角形を重ね並べたような十字架が立っている。その頂には白い鳥が頭上を下にして舞い降り、そこからは黄色い光が十字架と小山に降り注いでいる。

これは、ゴルゴタの丘の上の「キリストの磔刑」を暗示[2]しているものと推測されるが、今後調査していくにあたりとても興味深いものとなっている。

同じような図像として、ローマのサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ聖堂：アプシス・モザイクがある（図版Ⅳ参照）。

Ⅱ十字架を構成する 12 羽の白鳩

同じくアプシス正面に左、前方から 8 番目にあたる壁画には、水色の背景にオレンジ色の十字架が描かれている。その十字架の中には、横向きの白い鳥が計 12 羽描かれ、また十字が交差するところに人の顔面がうかがえる。

これも、「キリストの磔刑」の十字架[3]と思われるが、12 羽の鳩が示すものとしては今後の考察が必要である。

類似の図像として、ローマのサン・クレメンテ聖堂：アプシス・モザイクがある（図版Ⅴ参照）。

Ⅲオリーブの枝をくわえた鳩

続いては正面に対して右側、入り口側から 2 番目。薄い水色の中にその白い羽を広げた一羽の鳥は、くちばしに緑色の枝を挟んでいる。

これはノアの方舟の鳩を表している。鳩は、まさに今、方舟に緑色のオリーブの枝を運び終えようとしているかのようである。オリーブの枝をくわえて戻ってきた鳩に、ノアは大洪水の水が引いたことを知り、人間が神によって赦され、救われ、平和がもたらされたことを知る。

この旧約聖書・創世記 8 の「ノアの大洪水」から、鳩は「赦し・救い・平和・吉報・聖霊・天啓」の象徴を、オリーブの枝それ自体でも「平和」の象徴を帯びることとなったのである。

同様の図像として、ローマのサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ聖堂：複数の彫刻装飾、壁面・床面装飾（図版Ⅵ参照）、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂：床面装飾がある。

Ⅳぶどうツタと鳩

---

[2] 小山の白い 4 本線は、四福音書を象徴する 4 つの河。山と十字架は、ゴルゴタの丘の上で処せられたキリストの犠牲を表す。聖霊の白鳩が舞い降り、光である神が降り注がれている。

[3] 磔刑の十字架が、さらにオレンジ色に塗られることによって、受難を形象する。中央の人面はキリストである。

アーチ部分、一つ一つのモチーフの上部には一連の歴代ラヴェンナ司教の半身像が円形の中に順序よく整然と描かれている。片側 27 個の丸を囲む長い長方形の内部は橙色で塗られ、ぶどうとその葉、ツタが全体に伸びている。葉をくわえたり、ツタに止まったりしている白い鳥がところどころに描かれている。

これは、ただ単に絵で隙間を埋める純粋な装飾と捉えることができそうだが、隠された意図を探る必要がありそうである。

関連図像として、「ランプ（lucerna）」の装飾が上げられる（図版Ⅶ参照）。

４－7

このように 6 世紀の一つの聖堂をめぐりあらゆる事項を研究して、全てのことに共通して言えるのは、それぞれにその時代の想いが込められている、ということである。聖堂の中に一歩足を踏み入れた時に、全体の一つ一つが訴えかけてくる、そんな感覚が今でも思い出される。

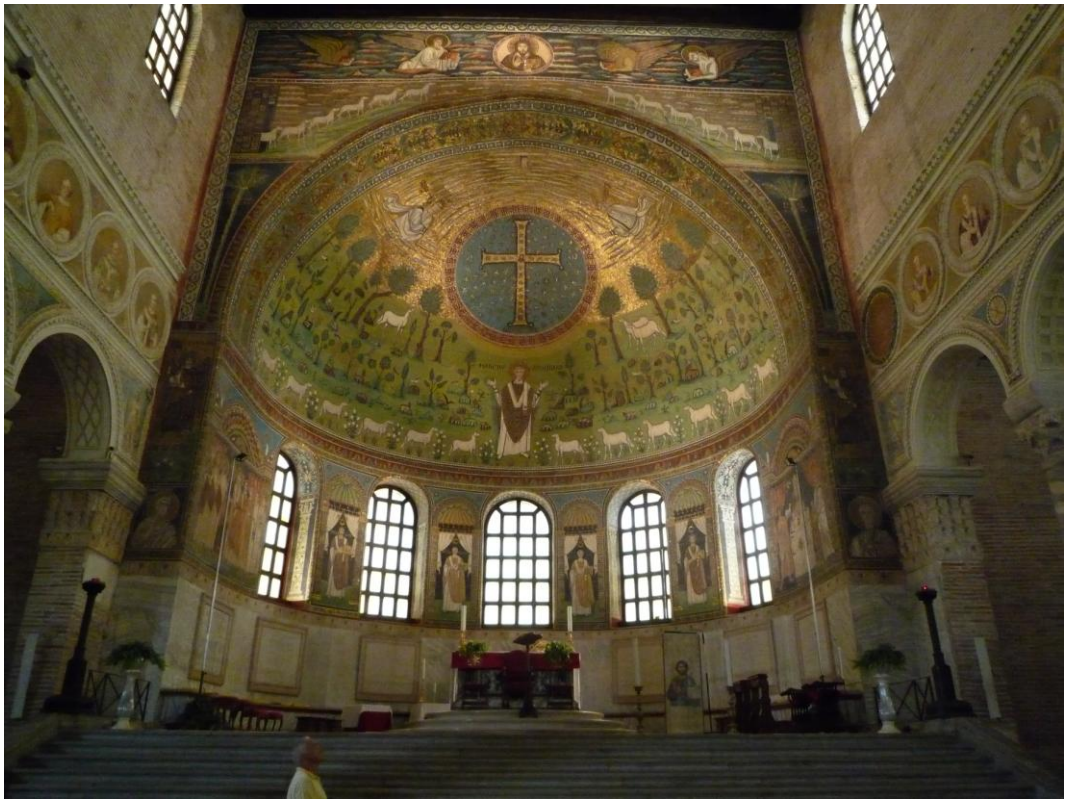
５　まとめ

今回、研究旅行ということで図版や資料で見た図像を自分の目で確かめることができた。それだけでなく、図版や資料に取り上げられることのない、それほど重要ではない場所やさりげない場所に描かれた図像をも確認することができた。そもそも、観光地であり、多くの日本人も訪れるローマのみならず、観光ルートから大きく外れた小さな港町、ラヴェンナを訪問することとなったのは研究旅行だからこそと言える。そこでは、現地でしか見ることのできない建築・モザイク・壁画、景色・人・雰囲気を存分に感じることができた。それは目的を持って旅行することの意義を再確認させるものとなった。

参考文献・資料

1　『地球の歩き方　イタリア 2007～2008 年版』　（ダイヤモンド社　2006 年）
2　ジョン・ラウディン著　益田朋幸訳　『岩波　世界の美術　初期キリスト教美術・ビザンティン美術』　（岩波書店　2000 年）
3　名取四郎　『キリスト教美術の源流を訪ねて 1－イタリア編』　（教文館　2006 年）
4　「MATERIALI ED ISTRUZIONI」　（“ARTEMOSAICO” di Liborio Puglisi）
5　高橋榮一編　『世界美術大全集　第 6 巻　ビザンティン美術』　（小学館　1997 年）
6　アンドレ・グラバール著　辻佐保子訳　『人類の美術　ユスティニアヌス黄金時代』（新潮社　1969 年）
7　W. E. ポウスト著　木寺廉太訳　『キリスト教　シンボル・デザイン事典』　（教文館　2007 年）
8　ジェイムズ・ホール著　高橋秀爾監修　『西洋美術解読事典－絵画・彫刻における主題と象徴』　（河出書房新社　1988 年）
9　ゲルト・ハインツ＝モーア著　野村太郎・小林頼子訳　『西洋シンボル事典－キリスト教美術の記号とイメージ』　（八坂書房　1994 年）
10　ジャン＝ポール・クレベール　『動物シンボル事典』　（大修館書店　1989 年）
11　マルセル・パコ著　松本富士男・益田治子訳　『キリスト教図像学』　（白水社　1995 年）
12　ミシェル・フイエ著　武藤剛史訳　『キリスト教シンボル事典』　（白水社　2006 年）

図版Ⅰ　サンタポッリナーレ・イン・クラッセ　外観



図版Ⅱ　サンタポッリナーレ・イン・クラッセ　アプシス・モザイク

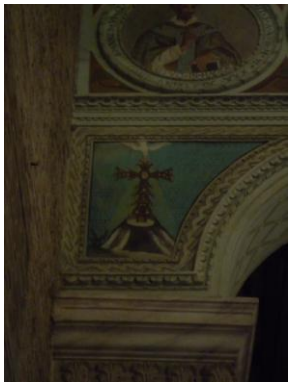
図版Ⅲ　モザイク工房

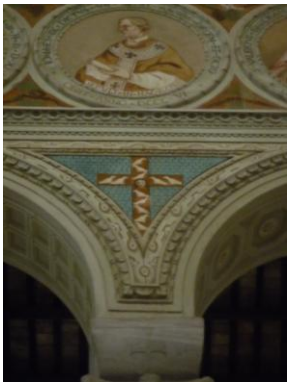
図版Ⅳ　サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ聖堂　アプシス・モザイク

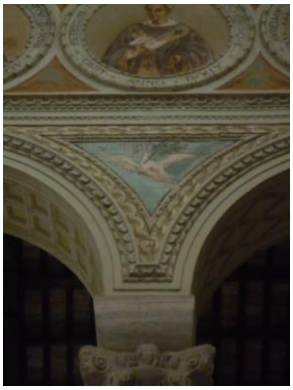
図版Ⅴ　サン・クレメンテ聖堂　アプシス・モザイク

図版Ⅵ　サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ聖堂　床面装飾

図版Ⅶ　ランプ（lucerne）







４－6 で取り上げた作例の図版　上左からⅠ～Ⅲ　下Ⅳ

研究旅行概要

8 月 31 日早朝、サルデニア島（他件の研究先）からイタリア本土、チヴィタヴェッキア港へ到着。電車でローマ・テルミニに着き、アパートを借りる。ローマ慣らしに、アパートのあるマンゾーニ周辺から、パンテオン近くのジェラート屋「ジョリッティ」を目指しつつローマを観光する。

トレヴィの泉・パンテオンなど

翌日、アパート付近を調査。サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ聖堂の正面の並木道を通り、楽器博物館を訪れるが休館。教会と城壁（と落書き）を見て、ラヴェンナへと出発する。

夜八時、雨のあとの静かな並木道をオレンジの光に照らされながらホテルへ。2 泊する。

ラヴェンナ：　サンタポッリナーレ・イン・クラッセ聖堂
サンタポッリナーレ・ヌオヴォ聖堂
サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂
サン・スピリト聖堂とアリアーニ洗礼堂
サン・ヴィターレ聖堂
ガッラ・プラチーディア廟
ネオニアーノ洗礼堂
司教博物館
サン・フランチェスコ聖堂とダンテの墓　　など

9 月 3 日、ラヴェンナを堪能し、ローマへと戻る。

翌日、ヴァティカン博物館、サン・ピエトロ大聖堂・広場に半日を使い、それからサンタンジェロ城、ナヴォーナ広場、ポポロ広場などを歩く。

5 日、観光最終日はコロッセオ周辺やトラステヴェレ地区を中心に観光。イタリア人も一緒に最後の晩餐。

6 日、いつものバールのお兄さんに別れを告げ、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂に旅行の安全を祈り、日本への帰路に就く。